足立史談
第690号
2025年8月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562

もくじ

新常設展解説③百万遍… P1
足立歴史地理案内④地盤沈下との堤防かさ上げ… P2

展示中の堀之内の百万道具

上　押部阿弥陀院百万遍の数珠　右下　押部の百万遍のようす（2008年）
左下　昭和10年（1935）に作られた数取りのついた箱。一札十万。

新常設展示紹介 ③

百万遍（ひゃくまんべん）　郷土博物館

新常設展示を紹介するシリーズ。今回は、二階ギャラリー、「人々のつながりと行事」のコーナー、「集落を守る行事」から百万遍を詳しく紹介します。

■百万遍念仏　「百万遍」は百万遍念仏とよばれるもので、念仏の功徳を得るために念仏を百万回唱えることです。平安時代中期以降盛んになりました。

一人で念仏を唱えて百万数えることより、大勢で唱える念仏の合計を数えることが広まり、また厳密な回数にこだわらず多くの念仏を唱えることを重視するようになりました。

時代が下がると民間にも広がり、大きな数珠を大勢で輪になって繰りながら念仏を行うスタイルがつくられていきました。

本来は、自らの極楽浄土への往生のための念仏が、通夜や葬儀、追善供養のための年忌、春秋彼岸などで行われるか、さらに虫送り念仏・雨乞い念仏など農作物の豊作にかかわる願いや天災・病気に関する悪疫退散・無病息災などを願う際にも行われるようになりました。

いずれにしても、大勢で唱えることによって増幅されると考えられる念仏の力を利用するものです。

■足立区の百万遍と念仏講　足立区では百万遍念仏を百万遍と省略してよびます。区内の百万遍がいつから行われているのかは不明ですが、千住二丁目に、元禄八年（一六九五）から伝わる百万遍の帳面があったとされ、「百万遍念仏講中」が存在しました。（「千住の百万遍永野家資料から」足立史談　六〇一号、六〇二号参照）大数珠や鉦（かね・しょう）、撞木（しゅもく）などの道具が揃っていたようですが、記録から見る限り葬儀や法事などの活動が主だったようです。

念仏を行う仲間を念仏講とよび、区内には念仏講が各地にありました。百万遍も念仏講によって行われています。

区内の念仏講は、その多くが年配の女性たちによるものでした。集まって念仏・御詠歌などを唱和し、終了後には持ち寄ったお茶菓子で世間話をしてくつろぐ、女性の娯楽と交流の場でもありました。

このような念仏講では、念仏の回

数を意識せず、また、大数珠を持たずに、鉦や団扇太鼓を叩くのみで、そこでの仲間との唱和を目的にしていることが感じられます。

また、伊興横沼の念仏講は、念仏は行うものの実質的に葬儀時の相互扶助を行う仲間を示し、遺された念仏講規約には、葬儀の手順や当番などについてまとめてあり、墓穴堀りなどの内容もあることから、女性ばかりの講ではなかったことがうかがわれます。

つまり、念仏・御詠歌・和讃を行う仲間を念仏講とよびますが足立区内では、大きく次の三つの性格に分かれるようです。

一、大数珠を繰り「南無阿弥陀仏」の念仏の回数を意識するもの。そして、悪疫退散・無病息災を祈る村巡りを行事とし、それ自体を百万遍とよぶもの。

二、念仏より御詠歌や和讃の唱和を主として行い大数珠を所蔵しないもの。

三、念仏等は行うものの、主に葬儀を協力して行う仲間を示すもの。

次に念仏講のなかで、百万遍の伝承を持つ地域を紹介します。そのほとんどが、昭和時代に消滅しており、『足立風土記稿　地区編』（足立区教育委員会発行）に報告されているものをまとめます。

■鹿浜押部の百万遍　聞き取り調査でたどれる百万遍は、仏事のほか、集落の厄除け、悪疫退散・無病息災を願って行われる年中行事になっています。

現在、唯一区内で行われており、区登録文化財となっている押部阿弥陀院百万遍も、戦時中一度途絶えましたが、昭和四〇年（一九六五）ごろまで、集落を回る百万遍を行っていました。かつては、五月二八日の不動尊の祭礼日に行われ、四〇軒ほどの押部の家々を、数珠廻しをしながら回って厄除をし、迎える家では、甘酒やお菓子でもてなしたといいます。現在の押部の百万遍は、押部町会が主催となり五月二八日に近い日曜日に、阿弥陀院で行われ、法要のあと、境内に数珠を持ち出し、二〇人ほどで念仏を唱えながら回します。ここには、念仏の回数を数える数取りの道具が伝えられていて、一札に十万と書かれていて、十札ごと三列並んでいます。現在は「南無阿弥陀仏」一回につき一枚の札を動かし、（十万）、三列分にあたる三百万回終ると数珠の持ち手が交代するようです。

■堀之内の百万遍　平成六年（一九九四）に、最後の念仏を行って終了となったのは、堀之内の不動院を中心に念仏を行う居村、溜井、西のズシごとの講中です。この念仏のことを「祈祷念仏講中」とよび、年配の女性たちが行っていました。西祈祷念仏講中の道具の箱に大数珠や大鉦が遺されていました。常設展示で紹介しているのはこちらの道具です。

■栗原の百万遍　栗原の後栗原ズシでは、平成のなかごろまで、徳寿院で女性たちによる念仏講が行われていました。大数珠廻しは行われていませんが、文政八年（一八二五）の記年のある数取りのついた大数珠の入った箱が遺されています。

■伊藤谷の百万遍　かつて伊藤谷村といわれた現在の綾瀬一丁目付近で、昭和三〇年（一九五五）くらいまで百万遍が行われていました。薬師寺に、大数珠が遺されています。

大数珠の珠は百八個あり直径が五cmほどある大きなもので、そのうちの一つは二〇cmほどもある大珠でした。

四月八日の花まつりの日は、百万遍の日で、御詠歌を行う大師講とよぶ仲間の女性たちが十人ほどで、大数珠を持って檀家を周り、仏壇を拝んだ後、大数珠を広げて念仏を唱えながら数珠廻しを行っていました。大きな数珠が自分のところに回って来ると、頭を下げます。そのうち念仏の速度が速くなり、最後に立ち上がって数珠を引っ張り合います。数珠を回している時間は十分ほどだったようです。

そして、念仏の後はお茶やお菓子で一休みするため、子どもたちは、ここで振る舞われるお菓子やおにぎりを目当てに授業が終わると一目散に駆けつけたということです。

■佐野の百万遍　佐野の鎮守柳野稲荷神社の社務所は、もとは阿弥陀仏を祀った庵を中川改修時に、地域の集会所や社務所として使用できるように改修したもので、ここに、大数珠、鉦、太鼓、算木（数取り道具）などの念仏講中の道具が保存されていました。

毎月二一日の弘法大師の縁日に、年配の女性たちが集まり、念仏をするほか講員の家で茶菓子を食べて話をする機会でもありました。

戦後しばらくは、定例日の念仏のほか、追善供養の念仏、また、年に一度悪疫退散・無病息災を祈って各戸を回る念仏祈祷も行われていました。

昭和五〇年（一九七五）ごろ、念仏に集まる人もいなくなり自然に消滅したといいます。

■大谷田の百万遍　詳細は不明ですが大谷田の常善院にも念仏講中の資料と大数珠が遺されているそうです。

■集落（ズシ）を守る行事　百万遍の母体である念仏講は、江戸時代の村をさらに分けるズシとよばれる単位で結成されていることがほとんどです。百万遍は娯楽と交流の機会となりながら、ズシの家々を回り日常のなかで最も身近なくらしの空間と人々を守る行事なのです。

（学芸員　荻原ちとせ）

足立歴史地理案内④ 》郷土博物館

地盤沈下との堤防かさ上げ

いま海面上昇の危機が訴えられています。かつて足立区も水没の危険性に直面した時代がありました。この記憶が薄れつつある言葉に「地盤沈下」という言葉があります。地盤が下がっていくことです。足立区にとって戦争被害とともに昭和の時代を代表する問題でした。地盤が下がることで問題になるのが、水面の高さが変わらないことです。足立区や葛飾区などのように潮汐による影響をうける感潮河川に囲まれたところでは、相対的に水位が上昇していくことになります。

図１　昭和40年（1965）頃、地盤沈下で常磐線の荒川鉄橋も下がり、航行する船にも障害となった。（当館蔵、内田静雄氏撮影）

図１は現在の足立区足立側から千住五丁目・日ノ出町方面を撮影しています。向こう岸の土手の左側に清亮寺本堂の屋根が見えています。

お気付きでしょうが、荒川の水面と鉄橋との間が迫っている状態です。これは洪水などで水位が上昇した時の写真ではなく平常時で、地盤沈下で水面が上昇した時代の写真なので、その深刻さが伝わってきます。

続いて地盤沈下の変遷を概観したいと思います。

【主な参考文献】　難波匡甫「東京下町低地の高潮対策に関する歴史的考察」（二〇一三年）、『足立区史』、『新修足立区史』などを参照。

■揚水と高潮　東京の東部、江東五区（足立区、葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区）は、明治時代の工業化の進展に伴い工場が地下水をくみあげる（揚水）量が増え、関東大震災が発生した大正十二年（一九二三）頃には地盤沈下が顕在化しました。とくに東京湾から入ってくる「高潮」によって脅かされました。さらに昭和二四年（一九四九）のキティ台風で発生した高潮が江東五区を襲い、大きな洪水被害を受けます。そこで昭和二五～三〇年（一九五〇～五五）にかけて第一次の「高潮防禦工事」が行われましたが、その後もたびたび洪水にみまわれました。

しかし戦後の経済成長に伴う工業の発展は、さらに揚水量を増やし、地盤沈下は進みます。昭和三三年（一九五八）の台風二二号でも大きな浸水被害を受けました。**図２**の写真は国道四号線が浸水したようすで、右に東武線と交差する旧梅島陸橋がみえます。

図２　昭和33年（1958）の台風22号の高潮で浸水した国道４号線。内田静雄氏撮影、足立史談会提供。当館蔵。

昭和三六年（一九六一）になり、「工業用水法」による揚水への規制が始まります。しかし、その後も地盤沈下は続いていきました。

■沈下のようす　端的に地盤沈下を物語る写真が次ページの**図３**です。昭和四二年（一九六七）に青井で撮影された井戸の沈降状況で、しばしば写真集に登場しますので、ご存知

図３　80㎝ほど沈んだ井戸（足立区青井）。昭和42年（1967）当館蔵

の方も多いと思います。農家にあった井戸のパイプが八〇㎝ほども上に抜けてしまっています。

記録では千住仲町も明治二五年（一八九二）から昭和四五年（一九七〇）の七八年間に約一・八ｍの沈下が観測され、同時期の江東区亀戸では約四・二ｍも沈んでいます。

■深刻な状況　地盤沈下の深刻さは、その影響が非常に大きいことです。浸水被害はその第一の影響で、常に生活基盤が脅かされていました。堤防の外に排水できない水がたまることになり、各地の「排水機場」が強化されていきましたが、強い雨が降るたびに、浸水が発生するようになったのです。

次に当時、盛んだった農業のうち主力だった水田稲作の生命線―用水が、うまく流れなくなりました。平坦な土地に張りめぐらされた用水は、場所によって沈下の度合いが異なり、その結果、水田にうまく水が行きわたらなくなったのです。用水の組合から離脱し、水田から畑作へと転換していく大きな要因となりました。

ほかにも物資を運搬する船の運航にも障害となりました。船が橋桁にぶつかったら運行どころか鉄道にも影響を及ぼします。

■荒川堤防のかさ上げと鉄道　深刻化した昭和四〇年代「新高潮対策事業」の一環で、荒川堤防のかさ上げが行われました。当時、荒川の河川敷（高水敷）は地盤沈下でしばしば冠水していました。**図４**は昭和四四年（一九六九）の空中写真ですが、当時の危機的な状況がよく見えています。写真右側に写る国鉄の荒川橋梁と老朽化が進んでいた千住新橋も架け替えが行われていきます。

荒川堤防のかさ上げにあわせて、常磐線や東武線の鉄橋の架け替え（堤防の上に鉄道を通す）が行われ、それに合わせて線路の高架化工事が行われました。東武鉄道の小菅、五反野、梅島の各駅は高架上に移り、常磐線も高架化がすすめられました。**図５**は、その二年後の写真で、東武線の橋梁が工事中です。

図４　昭和44年（1969）冠水した荒川河川敷に土盛りが行われている。当館蔵。

■海面上昇　揚水による地盤沈下が収まったのは揚水規制から三七年を経た平成一〇年（一九九八）でした。いま私たちが見る川沿いの風景は、地盤沈下と戦ったあとの姿です。

それから十五年を経た今日、世界中で進む海水面の上昇が観測されています。本記事の調べを進めてみて、水辺に暮らす私たちの先人たちが幾度も危機を乗り越えてきたようすを知ることができました。海面上昇という未曽有の事態にも、こうした経験を踏まえ、歩みがすすめられることを願います。

（学芸員　多田文夫）

図５　昭和46年（1971）の荒川堤防かさ上げ工事にあわせた鉄道橋梁の架け替え工事のようす。左が上流で常磐線、右が東武線の鉄橋。当館蔵。